

「モルド」の世代交代

旧ソ連領中央アジア・クルグズ(キルギス)北部農村におけるイスラーム宗教職能者と体制転換

吉田世津子(四国学院大学社会学部)

ソヴィエト連邦崩壊後の旧ソ連諸国における宗教復興、特に中央アジア諸国におけるイスラーム復興は、これまで政治学的・地政学的な視点から数多くの研究がなされてきた。現代中央アジア諸国におけるイスラーム復興はいわゆる原理主義的・純化主義的傾向と結びつけて説明されることが多く、各国の政治体制を不安定化させる要因とみなされがちである。タジキスタン内戦(1992~97年)、同国における秋野豊氏殺害事件(1998年)、クルグズスタン(キルギス)南部での日本人技師拉致事件(1999年)、また現地住民にとっての体制と武装勢力の衝突といった様々な事件や戦闘は、中央アジアにおけるイスラーム復興に「危険」というイメージを付与し、またイスラームの政治化・過激化が懸念されてきた。こうした政治化・過激化したイスラーム勢力が影響力を発信する拠点とみなされるのが、ソ連崩壊後に爆発的に増加したモスクやメドレセ(マドラサ、イスラーム宗教教育施設)である。

これまで中央アジア諸国におけるモスクの量的増加は、イスラーム復興の度合いを測る指標とも位置づけられてきた。モスクという「容れ物」が整備されるとともに、金曜礼拝などの重要な礼拝に集まるムスリムも増加していることは確かである。クルグズスタン(キルギス)におけるイスラーム復興に関しては、特に南部地方におけるイスラームの政治化が注目を集めてきた。同国南部はフェルガナ盆地の一部であり、より敬虔なムスリム定住民が多く暮らし、一般住民に対するモスク・メドレセの影響力が大きいと考えられる地域である。北部地方でもソ連崩壊以後は数多くのモスクやメドレセが開設されてきたが、スラヴ系住民の多いよりロシア(語)化された地域である。北部・南部ともに都市や農村におけるモスク=容れ物の整備は、そこに集まる人びとの増加に結びついている。従来の研究では、こうしたモスクに集まる人びとや特にその指導者とみなされるイスラーム宗教職能者が、やはり政治学的な視点から取り扱われてきた。だが、都市や農村の社会生活において、イスラーム宗教職能者がどのような役割を持ち、どのように位置づけられているかについては、あまり調査が進んでいない。本発表では、クルグズスタン北部に位置するK村を対象に、「モルド」と呼ばれるイスラーム宗教職能者を特に取り上げる。

クルグズ人社会においては、通常、アラビア語でクルアーンを読むよう教育を受けた者を「モルド」(molodo)と呼ぶ。モルドは通常男性で、イスラームに則った結婚式(nike)や葬式礼拝(janaza)を司式でき、なかでもイスラーム祭日(ayt, ayt künü)や金曜礼拝(juma namaz)を先導するのがイマーム(iymam)である。本発表ではK村を対象に、ソ連成立以前・ソ連時代・ソ連崩壊後の3つの時代区分において、どのような人びとがどこでどのように教育を受けてモルド/イスラーム宗教職能者となったのかを報告する。K村住民はかつてソ連成立前後まで、羊・馬を主な家畜とする遊牧民であり、1920年代末~30年代に、ソ連の国家政策によって定住民となった(全面的集団化)。かつての北部クルグズ遊牧民の間ではイスラーム宗教職能者はどのように教育を受け、また住民の間でどのような役割を果たしていたのか。ソ連成立後は科学的無神論が徹底され宗教が弾圧されたが、約70年におよぶソ連時代の間、イスラーム宗教職能者は定住後の村落社会においてどのように生き残りどのような機能を担ってきたのか。1991年のソ連崩壊以降は宗教復興のうねりとともに新たなイスラーム宗教職能者が出現しているが、ポスト・ソヴィエト農村社会において住民は彼らをどのように受けとめ、どのような評価を下しているのか。一地方農村のイスラーム信仰実践とそれを支えるイスラーム宗教職能者に対し、20世紀に起きたソヴィエト連邦の成立と崩壊という体制転換が、どのような意味を持ち影響を与えてきたのか、特に世代交代に注目し考えてみたい。本発表では1994年から長期間にわたって蓄積してきたフィールド資料に依拠し、これまで現代中央アジア研究ではあまり取り上げられて来なかった、草の根のイスラーム実践とその復興の様相に焦点を合わせ報告する。

【旧ソ連領中央アジア、クルグズ(キルギス)農村、体制転換、イスラーム宗教職能者】